みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴル風物誌：ことわざに文化を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4580

動物

家畜

――ともに生きる相棒

モンゴルで遊牧の対象となっている家畜は、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダの五種類である。これらを総称して「マル」という。

イヌはたいていの牧民が飼っているが、イヌは「マル」とよばれる家畜の範疇に入らない。また、草原にめぐまれないところでは、ウマのかわりにロバを飼っている牧民もいるが、ロバもまた「マル」には入らない。「マル」とは草原で群れをつくって放牧される動物であり、これらこそが遊牧民にとっての家畜なのである。

モンゴル草原での生活は、こうした家畜を基盤にして成立している。したがって、ことわざにも頻繁に家畜が登場する。それぞれの家畜の特徴をいかした表現がある一方で、いずれの家畜にも共通してあらわれるテーマも存在する。家畜の登場することわざでしばしばとりあげられるのが、「成長」というテーマである。

「泣いて泣いて人になる
鳴いて鳴いて家畜になる」

と、モンゴルでは人間の成長と家畜の成長とが並行的にとらえられている。家畜は、そだつ動物であり、そだてる動物である。その意味では、子どももまた同様であろう。「泣く子はそだつ」や「寝る子はそだつ」といった普遍的なことわざが、ここモンゴルでは、家畜と並行してあらわれるのである。

成長をめぐって人と家畜が並行的にあらわされる表現として、つぎのようなことわざもある。

「小さい頃から修道僧のようにふるまう
二歳子ウシの頃から種オスのようにふるまう」

幼少であるにもかかわらず、経験をつんだかのようにふるまうことがいさめられている。これと同様の意味をたくされたことわざは多い。

「二歳子ウシになるまえに
種オスウシになろうとおもう」

「沸かないうちに色濃くなった茶
二歳子ウシでいるうちに成長した種オスウシ」

などである。モンゴルのお茶はふつう煮出して濃くするものである。「時にいたって、茶がわく」といえば、それなりの時期が到来してようやく条件がととのう、という意味になる。それなのに、沸かないうちに濃くなるなどとは、即席もはなはだしい。よほどの奇跡として特別に評価されないかぎり、このことわざのように早熟としてマイナスに評価される現象といえよう。時が満たないうちに早熟することは、たとえば「歩むまえに、走るのを好む」という表現によっても風刺することができる。しかしながら、単に歩くとか走るといった動作の対比で表現するよりも、成熟した種オスの性的行動をもちだすほうが、はるかに説得力があるだろう。

こういうとき、家畜のなかでもっぱらウシが例にされているのには理由があるにちがいない。種オスウシは、成熟するとメスをおいかける。そうした性的行動は、ウシにかぎらず、あらゆる家畜に共通しているのに、なぜウシが頻繁にあらわれるのであろうか。

ウシの場合は、メスをおいかける期間がラクダやウマよりも長い。また、ヒツジやヤギならそうした行動を人が管理するが、ウシに対しては制限しない。さらに、ウシは宿営地のそばにいることが多いので、性的行動が目撃されやすい。こうした放牧管理のうえでの特徴があるからこそ、どの家畜にもあるはずの種オスの性的行動を、もっぱらウシが代表しやすいのである。

このように家畜をたとえにもちだすことによって、経験を尊重し、未熟をいましめることがで

囲いのなかで母ヒツジと子ヒツジの仲をとりもつ

きるとともに、成長して一人前になることを表現することもできる。

「子ヒツジの毛がぬけて
　二歳ヒツジの毛がはえた」

子ヒツジの毛は、くるくると巻き毛になっている。これが抜けてはえかわることは、まさしく成長のあかしである。家畜の成長が毛に明瞭にあらわれるという特徴をうまくもちいて、ことわざがしたてられている。

各種家畜に共通していて、かつ人にもまた共通している表現として、たとえば「十人十色」をあらわすことわざがある。

「父の息子は同じでない
　十本の指は等しくない」

というところを、ヒツジに登場させて

「種オスヒツジの角は
　あっちへ曲がり、こっちへ曲がり」

という。また、「カエルの子はカエル」を家畜によって表現する一連のことわざがある。

「喉の房毛のないラクダから
　短い毛の子ラクダ」

「母が栗毛まだらなら
　その子ウマは足元がまだら」

カエルではなくて、ラクダやウマという家畜が登場するところがまずモンゴルらしい。さらに、ただ単に家畜におきかわっているばかりでなく、その容貌がはっきりとしかも端的に明示されているところに、家畜をよく知っている牧民ならではの表現のたくみさがうかがわれる。同様の句でありながら、つぎのように句がつけくわわると少々ニュアンスが変わってくる。

「栗毛まだらから足元まだら
　尻さがりのメスウマから短尾の子ウマ」

すなわち、悪いものから悪いものへというわけで、うとましさがはっきりと表現されるようにな

るのである。

また、「トンビがタカをうむ」といいたければ、つぎのようなウマのことわざが用意されている。

「五両のメスウマから
五十両の子ウマ」

ことわざでは、人とともに、あるいは人のように家畜を表現することができるばかりでなく、人のかわりに家畜だけで表現することもできる。たとえば、「寝た子を起こすな」というかわりに、モンゴルではつぎのようなことわざが用意されている。

「草原にいる馬群をおどろかせない
寝ているヒツジを起こさない」

「寝ているヒツジを起こさない
横になった草をうごかさない」

子どものかわりに、ヒツジやウマが登場しているのである。

ただし、一見、似ているようであっても、いくらかニュアンスのちがいはある。日本のことわざで「寝ている子を起こす」といえば、無用の手出しをしてあたら問題をひきおこしてしまうことであるのに対して、モンゴルのことわざで「寝ているヒツジを起こさない」とは、こっそりとやること、あるいは他人とかかわりあわずに自分の本分をまもることをいう。

ふつう、「寝ている子」は起こさないものであろう。それをわざわざ起こすことは、あきらかにマイナスの評価をあたえられるべき行為である。一方、「寝ているヒツジ」は起こすことも必要である。放牧に出かけるならまず起こさなければならない。「草原にいる馬群」を追い立てることもある。すなわち、起こすことはけっして一〇〇パーセント悪い行為とはいえない。むしろ、起こさないのがふつうではない行動であって、その行動がマイナスとして評価されれば「こっそりやる」の意味になり、プラスとして評価されれば「本分をまもる」の意味になる。とりあえず、「起こさない」こと自体は価値中立的な表現であるといえよう。

モンゴルの人びとはながいあいだ、草原で家畜とかかわりあいながら生活してきた。人は家畜をみて人を知る。と同時に、家畜とのかかわりあいを人間社会での関係に投影することもできる。そうしてつちかってきた感性が、ことわざに固定されてゆく。さらに、より繊細な観察眼を駆使して、それぞれの家畜の特徴に応じたことわざも展開されてゆくのである。

ヒツジ

――従順は美徳か否か

大きなヒツジと書いて、「美」という漢字になる。もともと「美味」すなわち「おいしい」ことをあらわすための漢字である。モンゴルの大草原で、自然の牧草を食べてまるまると太ったヒツジは、まさしくおいしい。ヒツジの肉は食となり、ヒツジの毛皮は衣となる。ころさなくても、ヒツジの乳が食となり、ヒツジの毛はフェルトになって住居となる。生かしたままでも、ころしても十二分に役立つヒツジ。遊牧のくらしにとって、ヒツジはもっとも基本的な生活資材である。そんなヒツジであればこそ、ことわざでもヒツジは「財」として登場する。

「ヒツジのある人には、食がある
タンスのある人には、光がある」

まさに、ヒツジは食糧であることがあらわされていると同時に、タンスと対にされていることに

よって、ヒツジの財産としてのイメージがより明瞭になっている。財産のある人は生活に困らないという意味のことわざである。

ことわざに登場するヒツジは、他の家畜にくらべると、個性にとぼしい。そのことがかえって、ヒツジがもっとも普遍的な家畜であること、財産としてニュートラルな存在であることをうかがわせる。

一般にヒツジは、群れをなす従順な動物としてとらえられている。もちろん、そのような一般的な特徴はモンゴルでも変わることがなく、ことわざにもうつしだされている。個性にとぼしいとはいえ、ヒツジにも、ある一定のイメージは存在しているのである。

「ヒツジに対して英雄
英雄に対してヒツジ」

弱い立場の人びとを圧する一方で、強い立場の人にへつらうような人物を風刺したことわざである。ヒツジはあきらかに、おとなしさの象徴として登場している。

ヒツジの群れのなかにはヤギがまじっていて、そのヤギと対比的に表現されると、ヒツジの性格はおのずとより明瞭になる。

「ヤギは尾を千回ふっても、うしろに出ない

ヒツジは尾を一回ふれば、うしろに出る」

「ヤギが千回尾をふるよりも
ヒツジが一回尾をふるほうがよい」

いずれの表現も、軽率に回数をかさねるよりも慎重に本質をとらえるべきである、という意味でもちいられる。ヤギが軽率を代表し、ヒツジは慎重をひきうけていることになる。そうした両者の対比的な性格が、尾によって表現されているのはなぜなのだろうか。

ヤギの尾は、小さく上にピンと立ちあがっている。一方、ヒツジの尾は、脂肪のかたまりであり、大きなざぶとんのようにたれさがっている。双方の尾は、まったく対照的な様相をみせている。また、ヤギは細くて短い尾をピクピクうごかすのに対して、ヒツジは太い尾をズドンとたれさげたままであまりうごかさない。このように、尾の形状と尾の動作は、ヤギとヒツジを区別するうえでとても有効である。明瞭な弁別指標となるがゆえに、双方の行動特性のちがいが尾によって象徴されているのである。

従順であること、おとなしいことは、人が放牧管理するうえでは有用な特徴といえるであろう。しかし、人が人に対してヒツジのようであることは、かならずしもよい意味として評価されているわけではない。ただし、ヤギと対比されるときにかぎって、おとなしさが慎重さとしてプラスに評価されているのである。このように、従順がようやく美徳とされるためには、ヤギのような

緑の絨毯にヒツジの群れを放つ

従順でないものと対比される必要がある。

ヒツジはまた、オオカミと対になってことわざに登場しやすい。

「ヒツジは元気で
オオカミは満腹」

そんなことがあるわけない。オオカミはヒツジをおそう。オオカミが満腹なら、ヒツジはもはや生きてはいないし、ヒツジが無事なら、オオカミは飢えているはずである。こんなことわざのような状況はありえない。矛盾という状況を、矛と盾ではなく、ヒツジとオオカミで表現するのである。

「ヒツジもかわいそう
オオカミもかわいそう」

ヒツジとオオカミとはあきらかに敵味方の関係にあるのだから、双方に同情するのはばかげている。あるいはまた、よほどの博愛主義というものであろう。どちらもかわいそうだなどというような偽善的な態度に対して、嫌悪感をあらわしたことわざである。

このように、オオカミと対になってことわざにあらわれるとき、ヒツジのほうは、その性格を

あらわにするわけではない。襲撃されるものとしての立場が明瞭になるだけである。たとえヒツジが登場していても、つぎのふたつのことわざがそうであるように、むしろオオカミが主人公になりやすい。

「ヒツジを食べたオオカミは洞穴で横たわり
ただ走っただけのオオカミが猟圏に入る」

悪事をはたらいた張本人はうまく危険をのがれ、無実の者が冤罪をこうむることを、このように表現する。

「ヒツジのわたった川の水と称して
オオカミがなめる」

ヒツジをおそうならともかく、ヒツジのわたった川の水をなめてもヒツジをあじわうことはできまい。いかに貪欲であるか、その極端さを表現するときに、このようなことわざがもちいられる。もちろん、貪欲なオオカミを形容するためではなく、こんなにいやしいオオカミのごとき人に対してもちいるのである。

ところで、極悪なオオカミも下痢をすることがある。

「男が失策しなければ
オオカミが下痢をする」

「男が嫉妬すれば
オオカミが下痢をする」

男のなかの男が失敗せずに努力しさえすれば、あるいはまた男が嫉妬するほどに歯をくいしばれば、どんなに強い相手でもうち負かすことができるというものだ。「精神一到何事かならざらん」に相当するのが、これらのことわざである。オオカミは「下痢をする」ことで、敗者となる。

モンゴル語で下痢は「バース・アルダハ」すなわち「糞（便）を失う」といい、思わずもらしてしまう感じがうまく表現される。ちなみに便秘は「バース・ハタハ」すなわち「糞（便）が乾く」という。人がそうであるように、家畜も野生動物も、その体調は便の状態に反映されるものらしい。さらにモンゴルでは、わたしたちの想像をはるかにこえて、糞あるいは便に対して文化的な意味づけがなされている。オオカミの敗北を、人はその便で知るらしいのである。

たしかに、モンゴルの遊牧生活においては、ウシなどの家畜の糞が燃料となるから、糞は貴重な生活資材である。そのような実利的な価値があるにとどまらず、かわいた糞やかわくまえの便はすべて、モンゴル人にとって重要な観察の対象であり、かつまた思考の道具なのであろう。

ヤギ

――この強情なるもの

ヤギはヒツジの群れのなかにまじって放牧されている。ヒツジのなかでどれがヤギであるかは、遠くからでもその白さですぐにわかる。ヤギの毛はエナメル質であるために、群れのなかでいちだんときわだって白くみえるからである。近づいてみると、ヤギにはあごひげがあり、尾がピンと上にあがっているから、ヒツジとみまちがえることはない。

群れのなかでヤギは、集団のはしっこ、あるいは、すみっこのほうにいることが多い。ヒツジよりも草の先端を好んで食べるために群れのはしをあるく、といわれている。食べる好みだけでなく、生来、群れの先端をゆくという、すばしこい性格をもっている。たとえば、宿営地で雨がふりはじめたある朝、ヤギだけが家のまわりにあつまって雨宿りをしていた。

このようなヤギの性格を利用すれば、群れ全体を誘導することができるであろう。川をわたるときなど、ヒツジならおどおどしてなかなかわたろうとしない。そこで、まずヤギからすすめて川をわたらせて、ヤギのあとをヒツジにあゆませるのである。屠殺場へむかわせるときにも、ヤ

ギのこのような誘導的性格を利用する、という。

ヤギのすばしこい性格は、放牧の技術として役立てることができるから、プラスとして評価することもできる。ある日、テレビで動物のサーカスが放映されていた。クマやアシカが活躍し、しこまれた芸を披露する。それをみたモンゴル人が、家畜のなかでもヤギならこんな芸当ができるかもしれない、といった。ヤギは五種の家畜のなかでも賢い動物として認識されている、といえよう。

しかし、同じ性格がマイナスに評価されることもある。いつも群れのはしをあるくヤギは、ヒツジにくらべて「頑固である」し、すばしこいヤギは、ヒツジにくらべて「ずるがしこい」ということもできるのである。ひいては、従順なヒツジとはちがって、わがままでもある。そんな頑強な性格がヤギの特徴として認知されることになる。

意志強固というイメージは、とりわけオスのヤギ（種オスヤギ）にあたえられ、傲慢さのイメージをうみだしてゆく。オスの性がきわめて強調されていることが、ヤギの一つの特徴でもある。

「子ヤギの悩みを
種オスヤギは知らない」

「子ヤギであっても種オスなら
いばらないはずはない」

「オスの子ヤギの
精子は多い」

前者は経験した人にしかその苦労はわからないことを意味し、後二者は若輩のくせに尊大にふるまうことを批判する。これらのことわざにあるヤギという部分を、ウシやヒツジといったヤギ以外の家畜におきかえても表現できそうに思われるのに、ヤギでもってこのように表現されている。そこにこそ、ヤギらしさがひそんでいるのだといえよう。

種オスと子とが対になったり、同時にあらわれるとき、たとえばウシなら、「種オスウシは老いても、子ウシには負けない」などのように、老いてなお強し、と種オスの力が評価されるものである。ところが、ヤギの場合は、種オスが、幼少のころからつねに自分勝手な存在でしかないと強調されてしまうのである。

日本のことわざに「船頭多くして、船、山へのぼる」というのがあるが、これとまったく同義のことわざが、たとえば「嫁が多ければ、食は生のまま」「大工が多ければ、家はかたむく」「龍が多ければ、雨は降らぬ」などとモンゴルにも数多く用意されている。もしこれを家畜にたくしてかたるなら、ヤギによって表現するのがもっともふさわしいらしい。

「百頭のヤギに

六十頭の種オスヤギ」

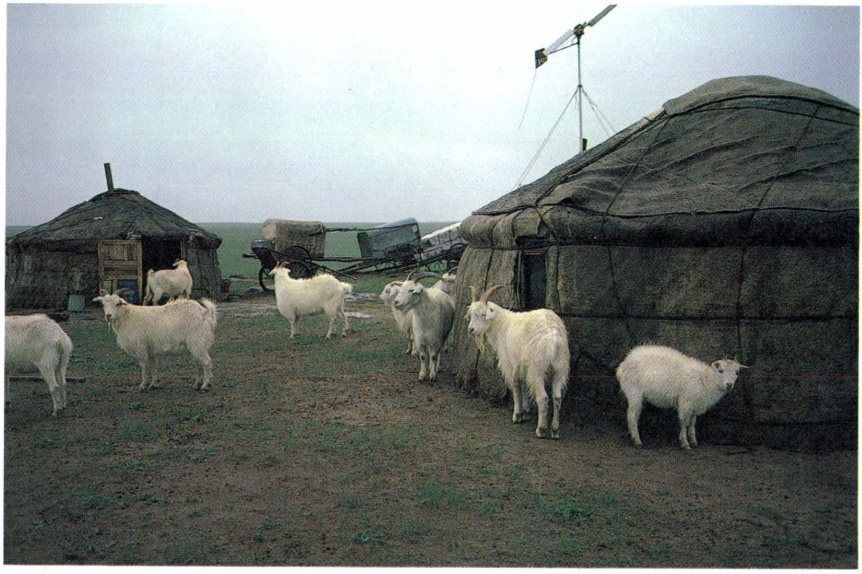
「六頭のヤギに
六十頭の種オスヤギ」

百頭のすべてがメスヤギだとしても、種オスヤギは三〜五頭もいれば十分である。それなのに六十頭とは多すぎる。ましてや六頭のヤギに六十頭とは、はなはだ多い。百も六も六十も、最初の音が類似していて頭韻をふむことができるために、このような数字がならんでいる。百に対して六十でも、六に対して六十でも、とにかく種オスヤギが多すぎる。こんなに種オスが多くては、群れをひきいるどころか、そのまとまりをくずしてしまうばかりである。群れのまとまりをくずしてしまうような、およそ従順とはほどとおい性格が、種オスヤギにあたえられている。

ヤギのもつ行動特性は、放牧の技術として生かされるとともに、このように認識の次元で、でしゃばりな性格をもつものとしてはっきりと固定されている。とりわけ種オスは典型的な性格をもつものとしてことわざにあらわれているのである。

さて、

「ヤギの二つの頭は
一つの鍋に入らない」



すばしこいヤギたちは雨宿りをする

といえば、すなわち「両雄ならびたたず」である。

ウシの頭のほうが実際にはずっと大きいにもかかわらず、ウシをもちいずにヤギをもちいてこそこのように表現する。それもまたやはり、ヤギの意志強固な動物としてのイメージが背後にあるからであろう。種オスでなくとも、ヤギは意志を主張する生きものであり、めだちたがりやなのである。また、ヤギの頭にはしばしば長い角がある。そんな風貌もまた、ヤギのイメージ形成に大きくかかわっていると思われる。

ヒツジにも角はあるが、ヤギの角のほうがずっと長くてとがっているし、またメスでも角をもつものが多い。「ヤギの頭」といえば、その性別や年齢にかかわらず、角が思いうかんできて、角をもつ姿がエゴの強さとイメージのなかでオーバーラップすることになる。

「オート（袋）に入れた角」

といえば、意見が調和しない状態、すなわち「百家争鳴」をあらわすコンパクトな表現であるが、これにはつぎのようなバージョンもあって、角といえばもっぱらヤギのそれであることがうかがわれる。

「ショーダイ（袋）に入れたヤギの角」

ヤギの角は、つぎのことわざのように、子ヤギのときからすでにその形態をあらわにし、その性格を表徴してしまうものであるらしい。

「角ある子ヤギは
　母を突く」

あるいはまた、

「子ヤギは角がはえて
　母を突く」

という。こうしたことわざは、まさに「飼犬が手をかむ」という意味をもっている。類似のことわざとして、ウシならば「そだてた子ウシが、車をこわす」というし、ウマならば「そだてたウマが、主人をける」という。イヌなら「かむ」で、ウシなら「車をこわす」で、ウマなら「足でける」という恩を忘れた行動が、ヤギならば「角でつく」とあらわされるわけである。

ヤギのもつ行動特性にくわえて、容姿のうえでの特徴がかさなって、ヤギはますます、ことわざのなかで強情なふるまいをみせている。

ウシ

――母と子をさかれて

ウシもまた、モンゴルの遊牧生活にとって貴重な家畜である。その肉を食べ、その乳をしぼり、その力を利用する。多角的な利用が、そのままことわざに投影されている。たとえば、食用であることは、つぎのようなことわざにあらわれている。

「ウシを食べても
言は食べない」

「言を食べる」とは、言をのみこんでその責任をとらないこと、すなわち言をひるがえすことにほかならない。ウシのかわりにヒツジであってもおそらく同じ意味のことわざが成立するにちがいない。ただし、ウシはモンゴル語で「ウヘル」といい、言は「ウグ」という。頭韻をふむことができるために、ウシが重宝されるのであろう。

ふつうの牧民の一家なら、年に一頭のウシをころして食べる。もっぱら老いたウシをころすのであって、メスならかなりの歳になるまで子をうませて、その乳をしぼる。乳をしぼるためには、かならず母と子をひきはなしたり、またひきあわせたりしなければならない。乳をよく出すために、母と子をひきあわせ、乳を子に全部のませないために、母と子をひきはなす。

つまり、搾乳の作業をするたびに、母と子のあいだに人間が割って入らなければならないのである。ウシが登場することわざの場合、母と子の関係をあつかっているものがめだつ。ウシのことわざにみられるこのような特徴は、ウシが遊牧生活においてもっぱら搾乳対象としてひいでた存在であることを反映している。と同時に、人間が母ウシと子ウシのあいだにかかわる関係の大きさをものがたっている。

「子ウシが鳴かないと
母ウシは慈しまない」

読んで字のごとく、きわめて単純な事実をあらわしたことわざである。母性愛なら、かならずしもウシでなくとも、どんな家畜でも表現できるだろうが、ウシの母子関係に日常的に関与しているからこそ、ウシによって表現することがもっともふさわしいと感じられるのであろう。

「母ウシを疲れさせずに

子ウシを痩せさせない」

母の乳を本来の子にあたえずに人間が搾取すること、それが搾乳である。母ウシに対しても、子ウシに対しても人は搾取している、といえるかもしれない。母ウシからは余分に乳をしぼりだすことになりかねず、子ウシからはその食糧をうばうことにもなりかねない。しかし、うまくバランスをとることは可能である。母ウシも子ウシも対等に世話をして怠らないことを右のように表現するという。

このように母ウシと子ウシが対にされていると、一見、双方の利益がオオカミとヒツジのそれのように矛盾しているかのように思われる。しかし、本来なら双方の利益は矛盾していない。人間がそこに介入して搾乳するからこそ、三角関係におちいって、そこではじめて矛盾が生ずるかもしれないのである。このことわざは、矛盾が生じるかもしれないと示唆しながらも、矛盾がいまだ生じていない状況をつげている。

矛盾が生じていないことをプラスとして評価すれば、世話がゆきとどいているという意味になる。もし、これをマイナスとして評価すれば、何も介入しないからだと非難することにもなりうる。すなわち、右のことわざは、風見鶏、傍観者をあざわらった風刺表現にもなるのである。

つぎのことわざの場合、搾乳からさらに乳加工までを了解しておかなければ、その意味内容を理解することができないだろう。

「油を胃袋につめると言って
子ウシをつめる」

「油を胃袋につめる」というのは、牛乳をしぼってからバターをつくって、それをヒツジの胃袋につめて貯蔵する作業をさしている。バターをつくろうとして、あまりに乳をしぼりすぎたために子ウシを死なせてしまったというのである。小さな利益のために大きな損害をだしてしまうことをさしている。母ウシと子ウシの仲を人はいつも割いていて、ときにはこんな失敗をやらかすこともあるわけだ。

つぎのようなウシをめぐる表現が人に応用されると、おだやかな口ぶりで協調性があれば他人の同情をえられる、という意味になる。

「やわらかい口の子ウシには
二頭の母」

「口がやわらかい」という表現は、家畜とりわけウマによくもちいられる。ウマにもちいると、制御しやすいという意味になる。騎乗に際して、ウマにはハミをかませて制御するから、そういう意味がうまれるのも当然であろう。一方、子ウシの口に対して、人はどのようにかかわっているだろうか。搾乳に際して母ウシからひきはなすときに、人びとはしばしば子ウシの口に指をつ

母ウシと子ウシの仲を割いて乳をしぼる

っこんで乳房からひきはなす。子ウシの口がやわらかいか否かを、搾乳する人びとはその指の感触で知っているわけである。口がやわらかいというのは、乳の吸いかたがおだやかだといった意味あいなのであろう。口がやわらかければ、実母ばかりか乳母からも吸わせてもらえる、とこのことわざはいう。

ウシのもう一つの貴重な役割は、車を牽引することである。モンゴルでは、チンギス・ハーンの天幕をそのまま牛車でひいていた。

「曳いたウシの
心臓をひきぬく」

といえば、一種の忘恩行為をあらわしている。心臓をひきぬくという表現は、がっかりさせるという意味でもちいられているので、ことわざ全体で、誠実に尽力した人をがっかりさせるという意味になっている。

また、つぎのことわざは、本当の功労者が尊敬されないこと、報奨が不公平であることなどをたとえている。

「曳くのは黒ウシ
祝福されるのは車」

役畜としてウシが登場するこれらのことわざをみると、ウシの性格が鈍重としてえがかれているように思われる。せっかく車をひいてきたにもかかわらず、心臓をひっぱりだされたり、祝福してもらえなかったり、およそ鋭敏であるとはいえまい。ウシのそんな鈍重な性格は、他のことわざにもみられる。

「芝地に咲いた花のうつくしさを
　ウシは知らない」

もののよしあしを区別するだけの教養のない人を、このように嘲笑するという。

「ウシは
　飲んだ水に糞をする」

水のかわりに井戸といってもよい。井戸に糞をするとは、忘恩行為もはなはだしい。ウシは水をよくのむ家畜で、人が誘導しなくても、みずからすすんで井戸にやってくる。そうした行動特性がよみとれる一方で、鈍重さもまたうかがわれるであろう。

ちなみに、もし、人が同様のことをするとすればどうなるだろうか。

「飲んだ井戸に大便」

いわば「あとは野となれ山となれ」と同様で、その無責任さかげんが非難されることになろう。

「ウシの耳に水をいれてもふりはらう
油をいれてもふりはらう」

有意義な忠告も無駄な、教育のしがいのない人をこのように表現するという。まさに「ウマの耳に念仏」「ネコに小判」である。

このことわざの場合、ウシをイヌにおきかえたまったく同様の句もあるから、かならずしもウシの特性をことさら投影したことわざとはいえないかもしれない。それにしても、ヒツジやヤギやウマではなくウシが登場しているのは、ウシならぴったりくるという鈍重なイメージが背後にあるからこそにちがいない。

牛車で井戸から水を運ぶ

ウマ

――智恵と力と正義の使者

ウマはモンゴル遊牧民にとって欠かすことのできない家畜であり、ことわざの世界にも多様に登場する。さまざまなことわざで、さまざまに登場するので、その性格をまとめるのはむずかしい。とりあえず、まず第一にいえることは、当然のことながら、乗りものとしてのウマという特徴がことわざにも明瞭にあらわれていることであろう。

「騎馬の人は
　歩いている人の苦労を知らない」

これは、ヤギの項で紹介した「子ヤギの悩みを、種オスヤギは知らない」とおなじたぐいのことわざである。ヤギなら子と種オスとで対比されるところが、ウマなら乗馬の局面で表現されている。

「ウマから降りることはあっても
言から降りることはない」

「言から降りる」とは、「言を食べる」と同様で、言をひるがえすという無責任さをあらわしている。ウシの項でかかげた同様のことわざでは、上(かみ)の句が「ウシを食べることはあっても」であった。ウシでは「食べる」というところが、ウマなら「降りる」となっている。やはり乗馬の局面で表現されているのである。

ところで、ことわざをみるかぎり、いったん口に出したことをひるがえすのは、モンゴルでは非常にいやがられている。正義感がそれをゆるさないのであろう。「言から降りる」や「言を食べる」といった表現のほかに、「口を失う」もまた同義の慣用句である。

「去勢馬を失っても
口を失わない」

「去勢馬を失えばつかまえればよい
口を失えばつかまえられない」

ともに去勢馬と口とをセットにして、「失う」や「つかまえる」というおなじ動詞をもちいて並行的に表現されている。いずれも、ひとたびいったことを撤回してはならないこと、すなわち撤回しなければならないような軽率なことをいうべからず、といましめたことわざである。

ウマは乗用するために去勢される。したがって、去勢馬とはまさに乗馬用のウマをさしている。乗りものとしてのウマの利用価値があらわになっているのは、つぎのことわざでも同様である。

「父がいるあいだに人を知る
去勢馬がいるあいだに土地を知る」

優秀な人がいるあいだにできるだけ多くの人と知りあい、優秀なウマがいるあいだにできるかぎりあちこちをまわってたくさんの土地を知るべきである、というのである。条件がととのっているあいだに時を逸することなくよく学んで将来にそなえるべし、という思想が表現されている。ウマは、移動の道具であり、その移動によってこそ貴重な知識や経験がもたらされる、とする騎馬遊牧民らしい思想の一端をうかがうことができよう。

去勢されたウマに乗るのがふつうであるから、種オスウマに乗ると、つぎのようなアクシデントもおきる。

「まだらの種オスウマに乗って

まだらの種オスウマをさがす」

いわゆる「燈台もと暗し」である。また、つぎのようなアクシデントにも気をつけなければならない。

「山のけものを見て
乗っているウマを失う」

「虻蜂取らず」という教訓は、山にけものを狩りにゆく騎乗姿によってあらわされている。

このように、ウマはもっぱら乗りものとして認識され、去勢馬という語彙でことわざに登場しやすいが、去勢馬も他のウマも群れとして草原に放牧されている。そんなウマの放牧風景がよみこまれたことわざもある。

「自分の馬群に応じて口笛をふけ
自分のふとんに応じて足をのばせ」

口笛をふくとは、けっして放牧をさぼっている様子をしめしているわけではない。たとえば、ウマに水をやるとき、湖水のほとりで牧民は口笛をふく。そうやって、水をのむようにしむけるの

ウマは種オスをリーダーにハーレムをつくる

だといわれている。状況に応じて、あるいは分に応じて、仕事をせよという意味のことわざである。まったく同様のことわざとしてつぎのようなバージョンもある。

「自分のふとんに応じて足をのばせ
　自分のウマに応じて鐙をふめ」

こちらの表現では、騎乗における人とウマとの一体性が強調されてくるであろう。

人馬が一体となるばかりでなく、ウマはウマと調和するものでもある。

「オローはオローに
　ジョローはジョローに」

オローとは、いつも群れからはなれたがる性格の家畜をいう。とくにヤギに多いといわれている。また、ヤギにかぎらず、ウシでもラクダでも、メスはとりわけ出産期になると群れから逸脱する傾向が顕著にあらわれるともいう。一方、ジョローとは側対歩のウマのことをさす。ウマは通常、四脚ばらばらな感じで走るけれども、なかには、前後の脚をきちんとそろえて右側、左側とすすむような走りをするものもあり、それがジョローとよばれる。長時間乗っても疲れないという理由から、一般にジョローは貴重なウマとみなされている。オローがけっして望ましい性格ではな

いのと対照的である。要するに、「類は友をよぶ」「類をもってあつまる」という意味のことわざなのである。

側対歩という特別なウマだけが調和しあうのではなく、ウマは一般にウマ同士調和しあう。騎馬の民は、長距離に移動する場合や、速く移動する場合などウマを酷使する際には、かならず交替用のウマを持参するものである。あるいは、人をむかえにゆくときなどは、鞍をつけてウマを持参する。つまり、たった一人で草原を移動するときでも、おうおうにしてウマを複数つれており、それらのウマが横一列にならぶものなのである。

「ウマとむすべば走る
木とむすべば止まる」

ウマをウマにむすぶといえば、交替用のウマなどを引率するためにウマ同士をつなぐことである。木にむすぶといえば、もちろん駒つなぎにつなぐことにほかならない。環境にしたがうということ、すなわち「郷に入れば郷にしたがえ」である。このような普遍的な人生の真理は、モンゴルでも多様なことわざに表現されているが、その一つとして右のようにウマに対するはたらきかけが好んでもちいられる。

ウマは、人と調和し、またウマ同士と調和する一方で、一群から突出する存在でもある。競馬のようにスピードをきそう場面を想定すればよかろう。

「先頭に来たウマは
万頭の母となる」

ひいでた人、あるいは最初の人は、おおいに尊敬されるという意味をあらわしているという。しかし、どんな駿馬も残して去ることのできないものがある。みずからの影である。

「ウマは速くても
影を捨て去ることはできない」

どんなに立派な人でも欠点はあるといった意味になる。

以上のように、ウマには、調和というテーマと、スピードにもとづいた能力というテーマがいかにもふさわしい。「オールガ」とよばれるウマとり竿が登場すると、これらのテーマがしばしば同時に内包される。

「オールガをもつ人の技量に
オールガ・モリが調和する」

オールガは、およそ四メートルくらいの木の棒で、棒の先にループのついた竿である。ループを首にひっかけることによって家畜をつかまえるという、簡単なつくりをしている。ウマを追いかけるときには、追走を得意とするウマに乗る。スピードがあるばかりでなく、体力もあって、また主人がめざしているものを確実に追いかけることができるように訓練された追走用のウマは、「オールガ・モリ（ウマとり竿・ウマ）」とよばれる。

ウマとり名人の技にくわえて、ウマとり上手なウマがそこにいると、ことわざはいう。つまり、人がどんなに優秀であっても、それに呼応してめぐまれた条件が必要であることを教えている。ウマとり名人にとっての「縁の下の力持ち」は、オールガ・モリというウマなのである。

「オールガにあれば、群れに
　唇にあれば、知恵に」

これは、ことばをできるだけ省略して表現するという典型的な手法をとったモンゴルのことわざである。一行目は、竿にかかる家畜があるのは群れにたくさんの家畜があるからだ、という意味が省略的な表現にかくされている。すると、二行目も同様に、唇にのぼることばがあれば頭脳にたくさんの知識があるという意味であることがわかるだろう。もとがよければ結果もよいのは明白だ、という意味のことわざであるという。このように、ウマとり竿は、まさに技や知恵を象徴する道具となっている。

ウマとり竿を手に男たちは草原につどう

ウマとり竿を手にして追走する

ラクダ

――ラクダに乗って、天までとどけ

ラクダは他の家畜にくらべて断然大きな図体をしている。その大きさがことわざでは強調されてあらわれる。

「針ほどの穴から
ラクダほどの風」

小さなミスが大事をまねく。いわば「蟻の穴から堤もくずれる」ようなものである。小さな穴がおなじでも、堤がくずれるのではなく、風がふくというところが、いかにもモンゴルらしい。草原では、しばしば強い風がふきあれ、風に追われて家畜が行方不明になることもまれではない。強風を形容するのに、ラクダが登場し、その大きな図体のイメージが喚起されている。

日本のことわざでも、針の穴から風はふきすさぶ。たとえば、「針の穴から棒ほどの風」あるい

は「針の穴から杵ほどの風」といって、寒くて身にしみる風を表現する。モンゴルでは、表現のうえでいかに似ていても、さらに奥深い意味が付与されている。風は単に冷たい寒気をさしているのではなく、大きなできごとや困難を意味している。だからこそ、杵や棒のようにサイズだけをしめす指標のようなものではなく、もっと巨大な実体としてラクダを登場させたくもなるのであろう。

「天の音にクモ
ラクダの足にカエル」

なんだか奇妙な動物のとりあわせではないか。天の音とは雷のことであり、落雷でクモが死に、ラクダにふまれてカエルが死んだというのである。騒動のために弱小なものが犠牲になることをあらわしたり、極端に大小の異なる二者をたとえるのに、もちいるという。

このようにラクダはいつも大きい。だから、ラクダにつける道具もまた大きい。つぎのように「大は小をかねる」ことができる。

「ラクダの鞍敷がすりきれても
ロバの鞍敷が三つできる」

大きなラクダに乗ると、背が高くなる。ラクダは、天空に近づく乗りものなのである。

「ラクダに乗った人は
天に近い」

経済的な地位があれば社会的な地位があるに等しい、ということがこのように表現されるという。経済的地位と社会的地位とはかならずしも並行関係にあるものではない。しかし、経済的な実力があれば社会的地位に匹敵するとみなされうることが、このことわざからうかがわれよう。

このことわざのように、ラクダと天が対になって登場する理由の一つは、ラクダに乗ることによってまさに高くなるからである。さらに、モンゴル語ではラクダが「テメー」で、天が「テングリ」で、ともに「テ」という音にはじまり、頭韻をふむことができることも、ラクダから天が連想されやすい理由の一つである。

「ラクダにとどかない手を
天にむかってのばす」

能力以上をのぞむことがこうして非難されている。まったく同様のことわざとして「太股にとどかぬ手を、天にのばす」「尻にとどかぬ手を、天にのばす」などがある。もともと短いことをあら

ラクダに乗って天に近づく

わすためだから、太股や尻などというように自分自身のからだの部位をもちだすのが手ごろというものであろう。にもかかわらず、ラクダのようにわざわざ大きな図体の家畜をひきあいにだすのは、ラクダと天とが、容姿と音との両面で関連づけられているからにほかならない。

ところで、ラクダは、少々あごをつきだすようにして歩く癖がある。それが人にはどうしても傲慢にみえる。そこで、ことわざではこんなふうに登場する。

「ラクダはラクダにほかならないが
ホルゴルはラクダではない」

ホルゴルとはラクダの糞のことである。ラクダの糞がラクダではない、などと至極当然なことをいっている。このことわざなら、ラクダでなくともあらゆる家畜で表現がなりたつように思われる。「ウシはウシにほかならないが、ウシの糞はウシではない」などと創作できそうに思われる。きっと、ウシでもウマでも何とか意味はつたわるにちがいない。しかし、このことわざの意味が「トラの威をかるキツネ」と同義であり、ラクダにこそ威張ったものというイメージがあたえられていることを知れば、やはりラクダに登場させるのが最適というものである。

「イヌは吠えるがままに吠えろ
ラクダは行きたいように行く」

障害を気にかけずに自分のめざしたようにすすむという態度が、イヌに吠えられても意に介さないラクダの情景によってしめされている。もっぱら、面倒をおこしてもなおわが道をつらぬく人のことをあしざまにいうのにもちいる、というから、ラクダの傲慢そうにみえる態度に対してマイナスの評価があたえられていることになる。

ラクダのなかで種オスは、きわめて特異的な性格をおびている。傲慢という文化的な意味づけがあたえられる以前に、そもそもきわめて荒々しい獰猛な生きものである。

「ラクダを放牧した人は
種オスラクダの性格をあやまらない」

経験者は熟練しているという意味をあらわすことわざである。種オスラクダの性格を知ることがラクダの放牧にとっていかに重要であるかを人びとが理解しているからこそ、このようなことわざが成立している。

獰猛な種オスラクダは、とりわけ発情期には危険きわまりない。そんな種オスラクダだから、つぎのように死体となってもおそれられる。

「死んだ種オスラクダの頭を

生きている去勢ラクダがこわがる」

ラクダはヤギと対比されやすい。ヤギは、ヒツジのなかにまじって放牧されていることから一般にヒツジと対比的に表現されやすい家畜だが、ラクダとも対比される。なぜなのだろうか。

ラクダの妊娠期間は十三か月で、せいぜい二年に一度しか出産しない。ラクダは増やそうとしても容易には増えない家畜である。一方ヤギは多産で増殖しやすい。いそいで増やすのに適しているから、しばしば貧乏人の家畜ともいわれる。「精子が多い」などと形容されてオスの性が強調されるのもうなずける。ラクダとヤギはまず、増殖スピードという面で対照的である。またラクダもヤギも、毛の利用価値が高い家畜でありながら、からだの大きさが対比的である。それゆえに、ラクダとヤギとはペアになりやすいのであろう。

「ラクダがもぐもぐ食べるのを
ヤギがうらやましがる」

他人のすぐれた条件をうらやましがることをいう。日本ならさしずめ「隣の芝生」をみくらべるところであろう。

たしかに、ラクダの毛は利用価値が高いものの、ラクダのもつ運搬力もみのがせない。ラクダといえば、隊商である。

ラクダのたてがみを切る

「最後尾のラクダの荷は重い」

「最後のラクダは荷に
　凍結した雪は春に」

前者は、最後の人の責任の重要性を指摘する。後者は、困難は最後にあると指摘する。ふたつのことわざの意味はまったく異なるが、いずれも、ラクダの隊商においてもっとも注目されているのはつねに最後尾であることを示唆している。なにごとも、最後が肝心というわけだろうか。

イヌ

――清濁あわせのむ動物

イヌは、非常に頻繁にモンゴルのことわざに登場する。ウマなどのあらゆる家畜よりも登場回数が多く、おそらくもっとも頻繁にあらわれる動物であると思われる。それだけ、文化的な意味づけがされているからであろう。しかも、実に多義的な意味をもちながら登場する。

イヌのあらわれることわざの一つに、つぎのようなものがある。

「歩いたイヌは
骨をかじる」

まさしく「イヌも歩けば棒にあたる」である。このようにわたしたちの慣れ親しんでいることわざと類似した内容をもつことわざもあるが、モンゴルのイヌは草原の遊牧生活のなかにくみこまれて、もっと日常生活に密着した存在となっているから、ことわざのなかにあらわれるときにも、

もっともっと複雑な様相を呈している。

そもそもモンゴルでは、ヒツジのそばにいるイヌといっても、けっして牧羊犬ではない。ヒツジの群れを誘導したりする知恵はない。もともと、そんなふうにしこまれていないからである。そのかわりに、いつも家の周辺をうろついて、家にやってくる客に吠えかかり、ときに噛みつき、宿営地のテリトリーを防衛する。家人は、イヌの吠える声によって客が来たことを知り、客人はまず「イヌを見張ってくれ」とか「イヌを取り押さえてくれ」とさけぶことによって盗人でないことのあかしをたてる。イヌはこのように、客を噛むような存在であるから、逆に噛まないということに意味が生じる。「イヌの噛まない客人」といえば、しょっちゅうやってくるうちに親しくなった人をさす。厄介に思われようとも、あるいはこころよくむかえいれられようとも、いずれにせよ、居候などはさしずめ「イヌの噛まない客人」である。

いまでこそ客を噛むくらいの役にしか立たないイヌだが、かつてはオオカミのような招かざる客もちゃんと撃退していた。そもそも、かれらは狩猟におともして活躍すべき存在だった。

「狩にはイヌが必要
馬群には竿が必要」

「馬群にいない種オスウマ
狩にいないイヌ」

イヌは小さな訪問客も威嚇する

ふたつのことわざの表現はちょうど逆になっているが、いずれもイヌが狩の道具であり、狩のための動物であることをしめしている。

一般にイヌは忠実さを表徴するが、なるほどモンゴルでも、そのような意味づけをされていることわざはある。

「イヌは人のえさを食べると
その人の門をまもる」

恩に報いるという意味であろうと容易に想像される。しかしながら、おもしろいことにそのようなプラスの評価があると同時に、マイナスの評価もあるらしい。些細な利益をもたらしてくれたにすぎない人に対してこびへつらうことを軽蔑するときに、このことわざをもちいるという。けっして忠義を絶対的に是としてみとめたことわざではないのである。イヌとその忠実さの連想が類似しているとはいえ、その忠実さをどのように評価するかは、文化によって微妙にちがうことがよくわかるであろう。

このように、たとえ忠実ではあっても、イヌがあまりこころよくうけいれられていないのには理由があろう。つぎのようなことわざに、好ましからざるイヌの行状が投影されている。

「イヌは千里をゆけども
　糞を食べるのをやめない」

「皮紐を食べるイヌは
　その癖をあらためない」

草原に便所をつくる必要はない。家畜が大地ですませるように、人もまた大地にそのまま排泄する。すると、宿営地のまわりには自然に人糞が蓄積してゆくはずだが、ほとんどそれらしきものをみかけない。じつは、イヌがちゃんと掃除をしてくれている。水分は大地に吸収され、固形物はイヌたちが食するのである。なかには、裾をまくった人の尻にじかに鼻面を近づけてくるほどせっかちなイヌもいる。えさをあたえているとはいえ、おいしいペットフードをわざわざあたえるわけではないから、皮紐をかじったりもする。おまけに、そういう性格は変わらない。「三つ子の魂百まで」という真理をさらに、つぎのようにいうこともある。

「乳を入れた器のにおいは消えない
　皮紐を食べたイヌの貪欲はなおらない」

イヌが悪しきものや粗末なものを象徴していることわざはいくつもある。

「イヌの口に入った骨は
もとのままでは出てこない」

「イヌでありながら
喉いっぱいに骨をのみこむ」

「イヌは尾を
尾は乱れた毛を」

それぞれ、悪の勢力下に入るとよい結果にはならないこと、あまりに貪欲にふるまうこと、上から下へとつぎつぎに命令をたらいまわしにして責任をとらないこと、をたとえた表現である。

「イヌの腸には
バターは適さない」

「イヌの頭は
机の上には適さない」

ヒツジなどを屠殺して、家畜の内臓にバターをつめることはあっても、イヌの腸では代用できまい。つまらないものに良いものは合わないのである。また、つまらないものを尊重してもしかたがない。このようにイヌは、あきらかに家畜とくらべたときに有益性に劣る動物となる。ただし、イヌのものが役にたつこともまれにある。

「イヌの糞は
三年たてば薬につかう」

「イヌの糞は
一度は役立つ」

イヌの糞は、家畜の糞のように燃料にはならない。しかし、どんなに粗悪なものでも適した条件のもとでなら貴重なものになることもある、というのである。イヌにも光がみえてきた。

「イヌの尾に知識があるなら
ハダグをそえて学べ」

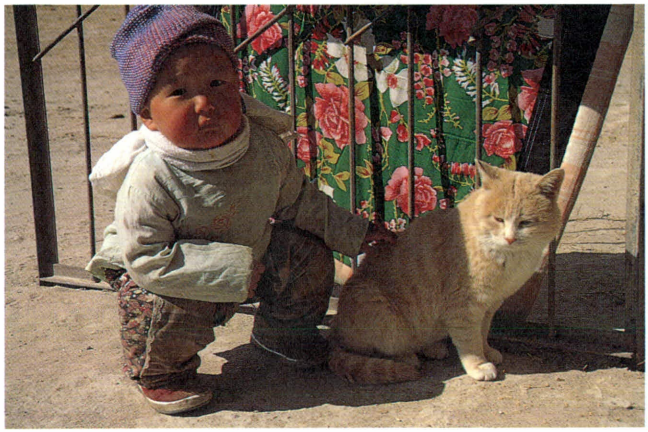
ハダグとは、薄くて細長い絹の布で、儀礼的な挨拶などにもちいる。経文や供物、あるいは贈答品などをうけわたすとき、かならず白色や水色のハダグをそえる。知識や知恵はどんな機会からも学ぶことができるものだから、イヌの尾にさえ知識があるかもしれない。あらゆる機会をのがさずに謙虚に多くを学べと、このことわざがおしえている。「イヌの尾から、書をとる」というように省略形でかたられることもある。

イヌにはよからぬ行状もあるし、遊牧の対象になっている家畜ほど価値がないとはいえ、イヌそのものが絶対的な悪者であるわけではない。悪いイヌもいれば善いイヌもいる。

「糞するイヌは
走るイヌをさえぎる」

まっとうなイヌと、他人のまっとうな行為を妨害するような、厄介なイヌとが登場している。同様の句として「走らないイヌが、走るイヌをさえぎる」「走るイヌにとって、走らないイヌはじゃま」などがある。

以上のように、イヌのイメージはかならずしも善悪のどちらか一方に固定されているわけではない。だから、もしマイナスのイメージでイヌを登場させる必要があるならば、マイナスの意味をもった形容詞をくわえたほうがよかろう。



子どもたちの遊び相手

「危険なイヌは
だまって噛む」

「噛むイヌは
声もなくしのびよる」

「人を噛むイヌは
歯をむき出さない」

これらはすべて陰で人を害することを意味している。日本でもちいられる「食いつくイヌは吠えつかぬ」や「吠えつくイヌは噛みつかぬ」ということわざと、非常によく似ているようにみえるけれども、空騒ぎをすることではない。

イヌの性格が善にも悪にも固定していないということは、かならずしも文化的な意味づけがないことをしめしているわけではない。善悪いずれの意味にもなるという両義的な意味があたえられいることにほかならない。

ところで、イヌのことわざをすっかりネコがおきかえてしまうこともある。

「よそのイヌは外に吠え

われらのイヌは内に吠える」

「よそのネコは外をねらい
われらのネコは内をねらう」

どちらも、仲間に悪意をいだいたり、身内に無益な人間を非難することわざである。このようにイヌとネコは交換が可能なこともある。しかしながら、遊牧生活のなかにくみこまれてきたイヌとちがって、ネコの場合、文化的な意味づけはとぼしい。

草原を移動する遊牧民は、伝統的にネコを飼ってこなかったが、いまでは各地の各家でネコをみかけることもある。草原にすむネコは、当然ながら、魚の味をほとんど知らない。もっぱら肉を食べる。だから、こんなことわざがうまれる。

「ネコに肉をみはらせる
怪物に小麦をみはらせる」

これでは、オオカミにヒツジをみはらせるのも同然であろう。信頼できないものを信じるという愚かな行為がたとえられている。さしずめ日本なら「ネコに鰹節」「鰹節をネコにあずける」という「鰹節」のところが、「肉」になっているわけである。

いかにも慈悲深いようにふるまって人をだますことは、ネコをもちいてつぎのように表現することができる。

「ネコが首に数珠をかけて
肉食をやめたという」

うわべだけ遠慮することを「ネコの魚辞退」というが、モンゴルではさしずめ「ネコの肉辞退」というべきであろう。